

生活文化史 *Seikatsu Bunkashi*

<史料館だより>

目 次

◇深江物語(3) — 昭和20年代の深江浜を歩く —	森口健一	2
◇本庄小学校の二宮金次郎像	藤川祐作	8
◇深江弁あれこれ	深江塾	10
◇本庄小学校の歴史的な写真と展示	大国正美	16
◇トライやるウィークと史料館 ——本庄中学校の生徒を受け入れて——	高田祐一	18
◇ホームページアクセスの現状	高田祐一	19
◇史料館日誌抄	道谷 卓	20

2013. 3.31
NO.41

高橋川下流にあり、本庄港とも深江の港、高橋の港とも呼ばれた。高橋川西岸から六甲山を望む景観。昭和24年（1949）に高橋川を改修した際に整備に着手し、昭和26年に完成了。係留されている漁船は打瀬船で、写真に見える帆は伸子帆（しんしほ）と呼ばれる縱帆である。伸子帆とは竹の細串を横に通し、帆柱に対して蛇腹式に伸縮できるようになっていた。



昭和29年の本庄港（喜多一晴氏撮影）

神戸深江生活文化史料館

深江物語(3)



写真1 昭和20年代末ごろの深江の航空写真（清家直衛氏提供）

昭和20年代の深江浜を歩く

深江華 森 口 健一

高橋の港（本庄港）
深江駅を降り、大日神社を左手に見て当時の深江銀座通りと呼ばれる

た道を南に行
くと家並みや
店舗が尽きる

ところに内海

の牛舎があり
ました。
その南には
「草の生えた

広場」があり
ます。この広
場は後に国道

四三号線にな
り、今の深江
交差点付近に
あたります。

昭和二十年代
末ごろの写真
があります。
（写真1）。

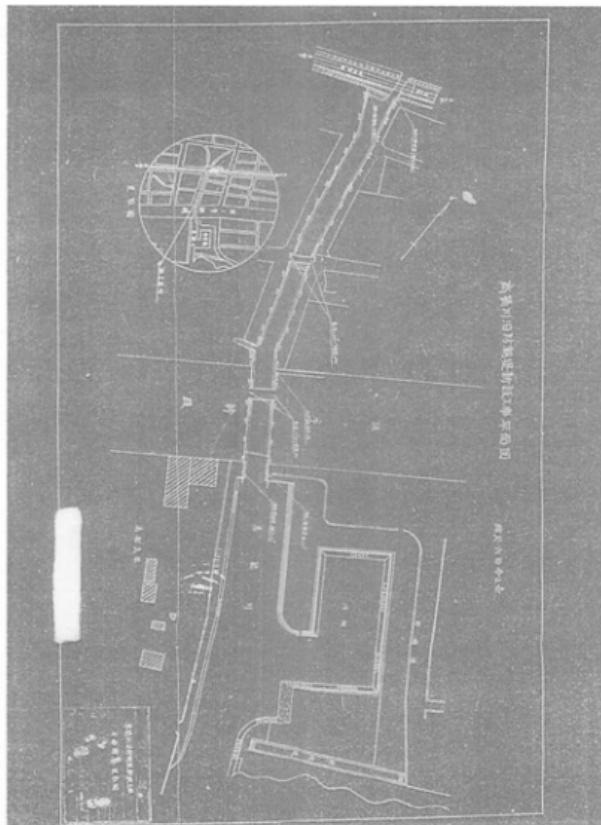
西の青木方面から幅五〇㍍で拡幅してきた道路用地は、まだ札場筋の西までしか整備されていません。もちろん何らの工事もされていないので用地には草が繁り、牛たちの憩いの場になっています。子どもたちが「内海の牧場」と呼んでいた場所です。

昭和二十七年に作図された神戸市の防潮堤工事設計図（設計図面1）には、国道四三号線は「浜ノ手幹線」と記されています。この地域の人は新しい国道ができると言うだけで、四三号線という名称を口にするのはずっと後のことなのです。

この浜ノ手幹線用地を渡りきると、深江銀座通りからの幅員一〇㍍ほどの道が海に向って伸びています。道は舗装されていません。この道に沿って西側に、深江の人々が「高橋の港」あるいは「深江の港」と呼んでいる港があります。東灘区役所が昭和五十一年に発行した「東灘区二五年」には、この港は「本庄港」と記載されているからそれが正式名称でしょう。さらに同書によれば「港というよりは船溜りといったほうがよい」とも書かれています。この港が出来るまでは深江や青木の漁船は高橋川の岸辺に沿って係留していました。よその地の人が見れば船溜りに過ぎないかもしれません、地元にとっては立派な「港」です。

同時に同書には「本庄港は、昭和二十四年、建設省が高橋川を改修したときには本庄町が改修に並行して作ったもので、完成は（神戸市との）合併直後の昭和二十六年二月だった」と記載されています。

戦前の地図を見れば、この場所はハンター邸跡地となっていますが、港を作るころには更地となっていた土地です。港はこの土地を高橋川の方から掘り込んで作られたものです。港はぐるりとコンクリートの防潮堤に囲まれた、東西約五〇㍍、南北約一二〇㍍の敷地です。



設計図面1 昭和27年作図の高橋川河口の神戸市防潮堤工事設計図



写真2 本庄港で船を「のぼす」風景（喜多一晴氏撮影、昭和29年）

船を係留する水面は東西およそ四〇㍍、南北八〇㍍のほぼ一対二の長方形で、水面を取り巻いて北と東西に荷揚げ場用地があります。南側は高橋川に向って西に傾斜を持った船揚場が設けられて、船揚場を上りきつたところにロクロがあります。ロクロは舟を「オカ」に上げる、いわゆる「舟をのぼす」ためのものです（設計図面1）。

「のぼす」という言葉は語感からも感じられるように「のぼる」から来ているものと思われます。「のぼす」には舟を單に陸に揚げるだけでなく、陸でないと出来ない作業が含まれています。陸に上げて船底に着いた貝殻を「搔き落とし」たり、船板の中に入り込んだ「舟虫を搔りだす」作業を行なうのです（写真2）。

掘り込んで出来た港の西側は高橋川の東岸を拡幅して出来た突堤状の船着場が出来ました。今の国道四三号線を少し南に下がつたところから、高橋川の幅を東に広げて川に沿って幅一〇㍍長さ三〇㍍ほどの施設です。この施設の西側、川から見れば東岸は垂直岸壁ではなく階段状になっています。

港の周囲の岸はコンクリート岸壁ではなくて、全て間石^{（まくいし）}を積んだものです（設計図面へ参照）。間石とは、石垣用の建築資材で、短辺が三〇㌢程度の大きさで表面は方形、奥に行くにつれて細くなり全体では角錐形をしています。石垣階段状の船着場、間石積みの様子は平成の今もそのまま残っています。

漁から港に帰ってきた漁船は「ゴスタン」で岸壁に着けます。ゴスタンとは漁師が「後へ下がる」という意味で使っていました。深江の船は大抵東の岸壁に船尾をつけていました（口絵写真）。船尾から船荷物を積み降ろします。打瀬船の中央部には「イケス」があります。イケスは船底の左右に丈夫な金網で出来た窓のような造りになっています。この窓を通して海水が自由に出入ります。沖で採ってきた大きめの魚はイケスにそのまま泳がせて生かしておきます。エビやシヤコあるいは小魚は竹籠や袋状の網に入れて、このイケスに漬けて生かしておきます。特に夜の漁（「よたせ・夜打瀬」）の時には、魚市場でのセリに出す翌朝までこのイケスに「生かして」おくのです。

高橋の港は西に神戸商船大学（現神戸大学海事科学部）のグラウンド、東は南に突き出た砂防突堤に挟まれた河口がその出入り口となっています。今では砂防突堤は埋め立てられてその姿はありません。しかし、高橋の港を右に見て海岸付近に突き当たったところから、東に

向って防潮堤が伸びています。ここにある海への開口部は、一番西に位置するもので、深江の海岸に造られた五つの開口部のひとつで、一〇段ばかりの階段を下りれば砂浜におり立つことができます。

開口部は海上に向って一・五㍍ほど

（写真3）。

この砂浜が「磯島の浜」で東西南北それぞれ約五〇㍍四方の広さがあります。

西は砂防突堤が海に突き出し、南は鉄筋コンクリートではなくただゼルタルで作られた堤防らしきものの残骸で海と砂地を区切っています。東側は南から続く堤防らしきものは、崩れて半ば以上が砂に埋まっています。この砂浜はほぼ正方形の土地です。南側の先は崩れた堤防のセメントがらを波が洗う岸となっています。ここは自然の砂浜海岸ではなく周囲に人の手が入った人工の砂浜です。

磯島の浜と海軍の防空壕

高橋の港を右に見て海岸付近に突き当たったところから、東に



写真3 高橋川河口の防潮堤
昭和30年5月 右端に防空壕が見える（大西令子さん提供）

この地には旧日本海軍の対空砲が据えられた高射砲陣地（海軍では高角砲という）がありました。戦中を知る人は「高射砲陣地があるて海軍の兵隊さんがいた」といいます。この海岸のすぐ近くに海軍の航空機を作っていた川西航空機甲南工場があり、その防御のために設けられた陣地です。

昭和二十年代の後半にはその対空砲の痕跡は全くありませんでした。敗戦と同時に撤去されたのでしょうか。対空砲はなくなりましたが、昭和三十五年から海岸埋め立て工事が開始される時にはまだ防空壕がありました。この壕は陣地守備兵士の退避壕として使用された軍事用の壕でした。

開口部を北に向けて厚さが上部で約一尺、側壁で〇・八尺くらいのコンクリート製のいかにも頑丈そなものです。いわゆるコンクリートの打ち放しのままで、対航空機用にカムフラージュのためにそうした仕上げをしたものと思われます。戦後の航空写真を見ても海岸にある大きな岩としか見えません。壕の入り口は大人が少し背をかがめて入れるほどの高さで、幅は大人の肩幅の倍ほどです。中に入ると急な階段が奥のほうに伸びています。この砂浜は水面から二尺以上の高さがありましたが、ジーン台風の高潮で壕の中は砂がいっぱい流れ込んで、昭和三十年頃には壕には数段の階段を下りたところで行き止まりになっていました。そのため壕の内部の様子は全く分かりませんでした。

軍や武器のことで、筆者には深江の浜の子ならではの思い出があります。敗戦と共にわが国の兵器武器はそれぞれの方法において処分されました。この付近の海岸からそう遠くない海上に、軍人が持っていた日本刀がかなり放棄されていました。昭和二十年代初めの頃には漁師が時折海から引き上げた刀をそつと持ち帰っていました。

日本刀が揚がるのは「ケタ漁」のときです。ケタ漁というのは神戸深江生活文化史料館の二階にその漁の様子とケタの実物が展示されています。たくさんの鉄の細く長い爪のついた「ケタ」という漁具で海底を掘り起こしながら主に貝類をとる漁です。貝が棲んでいる海底を、ケタの鉄の爪でゆっくりと掘り進めます。「海底に捨てられた刀」がその場所に沈んでいれば貝と一緒に網にかかります。たいていは精もなくさび付いていました。時には油紙に幾重にも包まれてほとんどさびずに引きあげられることもありました。

深江の漁師さんがそれらの刀を当局に届け出たという話は聞いたことがあります。さびの少ない刀はその漁師さんの家の押入れか漁具用の納屋の奥にしまわれました。さびが多くただの刃物程度のものはマキ割りの斧代わりに使われました。筆者は幼いころ大人たちのそんな刀の話を聞いて漁具納屋に忍び込んで少しあさびの付いた日本刀を探し出し手に取りました。日本刀というものは意外に重いものだと感じた記憶が残っています。周りにひと氣のないこと確認しては、その刀を持ち出して家の側にある木の枝を切ったり草をないだりしたのです。ちょうど「チヤンバラゴっこ」で遊ぶような年頃ですから、本物の刀は非常に魅力のあるものでした。こんな秘めやかな悪戯が出来たのは、浜育ちの子どもの特権であったかもしれません。

磯島の浜はよく魚が釣れる浜でした。磯島町の海岸には、高橋川河口から順に東へ四本の砂防突堤がありました。磯島の海岸は砂浜が広がった海岸ではありません。崩れた堤防の残骸をはじめゴロタ石の多いところです。その海底のせいと砂防突堤の形状が豆腐を並べたようなものでしたから、時節によつては地元の人を中心に釣りで騒わいました。（写真4）



写真4 砂防空堤 魚釣りが楽しめた。遠くに新明和工業甲南工場が見える

防潮堤

昭和二十五年

九月にジェーン
台風が阪神間を直撃しました。

当時、深江の海

岸には深江の町

全体を高潮から守る防波堤はあ

りません。ただ部分的には、堤

防らしきものはあ

りました。ひとつは高橋川河

口に東西の長さ約五〇㍍、幅四

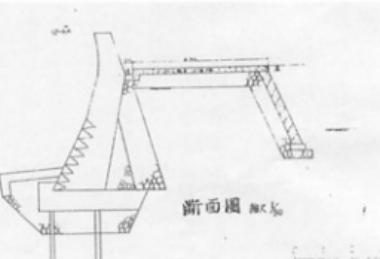
㍍高さが水面か

ら四／五㍍ほど

の砂の多いセメントの堤防。二番目が磯島の浜の旧海軍の陣地跡の周囲。三番目が東町（現深江南町二丁目）の東寄りの海岸にあるものです。

これらは海岸にある施設や建物を波浪から守る壁をかねたような代物で、鉄筋も入っていないセメントだけで作られました。そのせいで、ジェーン台風の高潮でそれら堤防はほとんどバラバラに割れて崩れていきました。地震で壊れたビルの残骸が海岸に転がっていると思えば分かりよいかもしれません。

この台風の被害を受けて神戸市は、合併間もない本庄地区で本格的な砂防工事を着手します。設計図面2によれば、新設の堤防は海水面から高さ六㍍、堤防の頂点部分で幅が〇・六㍍、基礎部分で幅約三㍍の鉄筋コンクリートとなっています。この堤防の陸地側には海からの波の衝撃に耐えるよう幅員五㍍（側溝を含む）の土盛りが設けられます。この土盛りは道路をかねたもので陸側は從来の砂地を掘り下げて間知石を積み上げた路肩となっています。この堤防補強の道路と間知石積みの痕跡は現在の深江南町三丁目の浜エビス神社跡前にあります。その付近の防潮堤の写真が残っています。



設計図面2 昭和28年の浜戎神社前付近の防潮堤断面図

深江浜の堤防は直線距離で（高橋川河口から傍示川河口の間）およそ一㌔㍍。この間に陸側から浜辺に出るための開口部が全部で五ヶ所設けられました。西から順に、高橋川河口付近。次に現在の南町三丁目と四丁目の境の札場通りが海岸に突き当たるところ。三番目が浜エビス神社のやや東。四番目が南町二丁目と三丁目の町境道路。五番目が南町二丁目中央付近で旧イワシ加工第一工場前付近の計五カ所です。

開口部の傍には厚さ五㍍、縱幅三〇㍍、長さ一・五㍍ほどの板が積み重ねられていました。これは高潮が予想されるとき開口部

の両端に掘られた溝にこれらの板をはめ込んで潮が「オカ」に流れ込むのを防ぐためです。

今では開口部は南町三丁目と四丁目の境、札場通りが海岸に突き当たるところに一ヵ所だけあります。また開口部を閉じるために鉄製の扉が設けられています。

五つの開口部のうち四つまでは陸地側からは、それぞれ一〇段から五段くらいの階段を利用して浜に下ります。ただひとつだけ浜工ビス神社の東よりにある開口部だけは、階段ではなく丈夫な木の板を並べたスロープで上り下りするようになっていました。これは前の浜が地引網の引き上げ場所であったためです。地引網で取れた魚はすぐその場で計量し、扱いカゴに入れて堤防の内側（陸側）にある三ヵ所のイワシ加工工場へ運びます。カゴを運ぶのは人が天秤棒で一人で運ぶこともあります。大部分はかつては大八車、のちにリヤカーで運んでいくため階段ではそれが出来ないためです（写真6）。



写真5 高さ6㍍の防潮堤。写っているのは氷販売業を営んでいた岩本重治氏（岩本喜美枝さん提供）

これら堤防に設けられた海への開口部は、深江の漁師にとって海の様子を見る格好の場所でした。毎日ほぼ定期にそれぞれの漁師が開口部の階段の踊り場に立って、海を見つめ空を見つめて「日和見」をしていました。同時に互いに今日昨日の漁の様子、明日の見通しなどの情報交換を行っていました。

余談ながら、ジョン台風後に造られた防

潮堤は、海岸の埋め立てが完了して後、当局の手によってその上部がすべてにわたって削り取られました。完成直後の堤防は陸側からは大人でも背伸びをしないと海は見えません。すくなくとも今よりは一倍は高いものでした。

昭和二十七年の堤防竣工図面によれば、深江の堤防は水面（大坂基準）から六㍍の高さがあります（設計図面2）。もし、この堤防が竣工当時のままあれば、神戸にも来るかもしれないという「四波の津波」より高い堤防があることになります。かつて深江を苦しめた「高潮」に備えた防潮堤がそのままあれば「津波」から深江を守るものになつたかもしれません。



写真6 リヤカーでのイワシの運搬 昭和30年ごろ

本庄小学校の二宮金次郎像

史料館研究員 藤川祐作

武庫郡本庄村本庄小学校は、明治二二年（一八九九）に開校し、翌三三年三月三日に校舎を建築し、創立記念日とした。平成七年（一九九五）の阪神・淡路大震災で校舎が被害を受け、二年後の平成九年現校舎が建てられた。震災で撤去された鉄筋コンクリート造りの校舎は、昭和二二年（一九三七）木造校舎から建て替えられた。

校舎の落成のおり、深江の村民が二宮金次郎石像を寄贈した（写真1）。

二宮金次郎（尊徳）といえば、江戸後期の天明七年（一七八七）、相模国（現在の神奈川県）に生まれ、幼いころに両親を亡くし、没落した生家を建て直し、その後、藩の財政再建をはじめ勤勉、倫約、農村復興などを手掛けた篤農家と言われている。安政三年（一八五六）六九歳でなくなっている。勤勉、倫約などの人柄から、明治三七年（一九〇四）年に修身の教科書に登場していく。



写真1 本庄小学校の二宮金次郎像

そんな金次郎が銅像として昭和三年（一九二八）に、神戸の篤志家中村直吉によつて神戸・明石の小学校・幼稚園に八三体とも

いわれている）が贈られた。中村は明治二三年（一八八〇）神戸に生まれ神戸証券取引所常務理事として活躍した。太平洋戦争が勃発し、金属の供出のはめになり、代用として石造・陶器などの金次郎像が普及していく。

昭和十二年三月吉日

松井末松

赤井末吉

磯野清治

渡辺石材店

三人はいずれも本庄小の卒業生で深江在住の一族で、赤井末吉は醤油業、松井末松は米穀商、磯野清治は地主だった。どのような理由で金次郎像を母校に寄贈したのかは定かでないが「本庄国民学校沿革史」には昭和一二年（一九三七）の校舎完成を記念して石像が寄贈されたことが明記されており、学校としても三人の寄贈を重く受け止めていたことが判明する。

昭和九年（一九三四）の室戸台風の際、別の鉄筋校舎に逃れて児童が命拾いをしたという被害経験があり、昭和十二年の校舎はこれを教訓に建てられた。それまで、近隣の学校と比べ貧弱な校舎だったため、本庄村の親も児童も肩身の狭い思いをしていた。「引率されて他校を訪問したときの児童の表情にそれが表れていた」という当時の教師の言葉が残されている。それだけに新校舎の完成は村中をあげての喜びだったという。

この校舎には塔屋の上に建つ避雷針に五つの輪が付けられた。當時本庄村は財政が豊かでなく周囲には反対があつたが、修身道徳の教師であり漢籍にも詳しい岩谷省三校長の強い希望によって実現した。二宮金次郎像と五輪の塔はセットで造られたのである。だからこそ学校のシンボルとして、戦後も守り抜かれたのだろう。



写真2 芦屋市親王塚町の矢部文字氏邸の二宮金次郎像



写真3 土庄町大部の備前焼の二宮金次郎像

昭和三五年頃を最後に金次郎像はほとんど買い手がなくなつた。昨今金次郎から何かを学ばなければならぬご時世かもしれない。最後になりましたが、小稿を書くにあたり、矢部女史が集められた資料、森口健一氏資料、神戸新聞（平成十四年四月五日・十月十六日）を使わせていただきました。

金次郎像は現在は運動場東のフェンス沿いに西向きに位置している。平成二年（一九〇〇）の「本庄小学校九〇周年誌」では、運動場の北西の花壇の中にあり南向きに位置している。震災に伴う校舎の立て替えのため現在地に移されたのである。この二宮金次郎の像については、何時の頃からか本校の児童の間で密やかに語り継がれた「本庄七不思議」の一としての話がある。「金次郎さんが深夜に校庭を本を声を出して読みながら歩き回っている」「夜になつて誰もいなくなつた広い運動場を無言で金次郎さんが走り回つている」という話である。先生が「こわい話」として児童に「勉学の必要性」と「運動の必要性」を語ったのが、いつしか子ども達は單に「こわい話」「不思議な話」として語り継いだと思われる。

今少し二宮金次郎像について筆者が最近目にした像を紹介してみよう。筆者が知る像としては、芦屋市親王塚町の矢部（旧関東）文子氏邸内の石像（写真2）がある。大阪府中河内郡南高安村字黒谷（八尾市）居住の父親が皇紀一六〇〇年すなわち昭和一五（一九四〇）に買い求め、現在地に昭和三五年（一九六〇）頃に移住した際に移したという。震災の折、前へ倒れ書物を持つ両手が手首から折れたが、出入りの植木屋さんに修復してもらった。當時として

石像は必ずしも銅像の代用ではなく、昭和三年（一九二八）に名古屋での御大典奉祝博覧会で石像をアピールしたのが最初であるといわれており、岡崎市の石材店が盛んに売り込んだ。前述した通り明治三七年（一九〇四）の教科書に採用されていたが、国策でなかつたことから、政府は各学校に像の設置を強要はしていない。私が卒業した小学校には元々金次郎像はなかった。

戦争中は天皇の写真や教育勅語を収めた奉安殿とセツツになつていた金次郎像だが、敗戦とともに奉安殿と撤去されたところも少なくない。本庄小学校の金次郎像は貴重な現存例である。

も個人で所有するのは珍しかったのではないか。

昨年別の調査・研究で小豆島へ三度訪島の折、島を一周する機会があり、土庄町大部の公共施設の一角にある備前焼の金次郎像（写真3）を偶然写真に撮ることができた。また島の東海岸にある福田港（小豆島町）近くの廃校になつていてる福田小学校内に石像一体があり、やはり矢部像同様昭和五年（一九四〇）とするされている。

前述した神戸市の中村が贈った銅像が須磨区の千歳公園に遺存しているとのこと。陶像は備前焼だけでなく信楽焼・九谷焼（磁器？）などでもつくられていた。

深江弁あれこれ

深江塾

はじめに

漁師町だった深江には、純農村部とは違った独特の言葉が使われた。

漁師言葉といわれる言葉である。決して美しいきれいな言葉ではないけれどこれも深江のひとつ文化ではあるまいか。

しかし、昭和三十年代に始まるこの地の都市化と共に、こうした言葉も次第に忘れられようとしている。このため深江塾の飯田一雄・三枝照於

・松下芳子・寺田喜多子・柳田陽子・森口健一が、深江弁ともいえる言葉を持ち寄って原案を作り、植田延生・津田雅敏・増田行雄・谷岡能史や史料館の方々も加わって精査した。言葉を選ぶに際しては、深江以外の地域でも使われていても、漁師町の言葉を象徴するようなものや、辞書的な意味や他地区とは違った深江独特の意味で使用されているものは採録した。用例を()で示し、標準語を()で示した。

人をさす言葉・人の様子・人格など

いらち 気の短い人。(あの人ほんまにいらちでなあ。五分と待たれへん)

こて 文句や不平・無理なことを言う人。動作や動詞は「こてる」。

「あの人はこてから、物言うの氣イつけいよ。まとまる話もややこしなるで」
こせこわい 私。男女とも使用。
私。原則男性が使用。高齢者は女性も使用。

わたし 私。どちらかといえば女性が使用。
めんめ 面々・おのの・それぞれ。複数形は「めんめら」。
われ 自分ではなく相手を指して言う。親しい間の会話で使用する場合は、「君」程度の意味で特段惡意はないこともある。

【注】複数の場合には、「わてら・わたいら・わいら」となる。
〔注2〕「よう」は下に否定語を伴つて「決して、とても／ない」の意味となる。

おんどれ お前。以下の者に使つたり、口論喧嘩によく使つたりする。(おんどれ、なにざらしてけつかる(おまえ、何をしているをするのだ))。他者が自分や仲間に對して卑怯な振る舞いや汚いことをしたときなどに、相手を罵倒する意味で使用。

おんどうら 「おんどれ」の複数形で語尾が「ら」となつたものと思われる。

おえはん・おいえはん 庶民から見てやや上級階層と思われる家庭の女性に對して使う。その家を訪問したときそここの奥さんや娘さんの呼んでもらつとき(おいえはん、おいでですか)(奥様はいらっしゃいますか)

ちんこほん 「小さい」を「ちんこい」ということから大阪弁の「ほん」をつけて「小さい人」となつたもの。

とも 単に呼びかけのときは「とも」「ともよー」といい「も」にアクセントあり、掛け声のときは「ともにしゃ」となる。戦前に江南地区にあった「若仲宿」で集う同級生・同期生の間でよく使用する。お互に幼馴染、連帯感の強さを他者に示すときにも使ふ。お互に幼馴染、連帯感の強さを他者に示すときにも使ふ。

あはたれ 「あは・ばか」に「たれ」を付けて人を指す。「あかんたれ」の「たれ」も同意。

の一たりん 「脳味噌が足りない・少ない」から転じて「間抜け」。

機械が利かない」などに使う。陰口や非難を含むときは「配慮も出ない人」という意味もある。(あいつは、ちよとノータリンやさかいしやーないで(あの人は配慮も出来ない人だから、どうしようもないよ))

ばつさん・ばつさい おでんば娘。(あいや。どうしようもないばつさんや(ばつさいや)。男児の場合は(あれは、何處のこんたや)へこのごん太坊主など、「こんた」を使用。

きさんじ 素直な人。多くは子ども・幼児に使用し「扱いやすい」「聞き分けのある」の意味。「気散じ者・気苦労のない人」から転じたものか。反対言葉として「こて」「こてる」(こねる)。「こねる」はぐずぐず文句を言う、「こねる」からの誤用とも。また「死」した」の意味でも使う。

ぼつそう・ぼつそり ほんやり者。きりつとしていない人。利発でない人。輪郭のはつきりしない状況の「ほんやり」と、同「ぼつそり」との合而成語か。「ほんやり者」を「ほんやり」と同じ使い方。
「あんなほつそりに任せせるからいかんのや」
「ぱてはり 見栄張り。動詞は「ぱてはる」。「はりぱて」を逆さまにした諺語か。「はて(太った腹)」をさらに張る意味か。「はてふり(棒手振り)・天秤棒を担いで行商すること、人」とは似てい
るが意味が異なる。(あないに、はてはらんでもええのに(あの
ように無理して見え張らなくとも)へもともとあいつは、はては
りやからほつとき(元来、あの人は見え張りだから)
できやま でしゃぱり。何事にもしやしり出て実際には成果も出
せない人。「出来星・成りあがり者」と同じような成語か。無理
でつきやま 「できやまな人」をさらに面前で言うとき、特にの
しているとき。(あいつは、でつきやまやからな。ほつとかなしやあ

ないで)

いちびり 「はしゃぐこと」からつまらぬことでもはしゃぐ軽い人を指す。(昨日の会議でなあ、あいつは、またいちびつとつたで)とつば 「いちびり」する人。「できやま」「ぱてはり」を合わせた

ような人。(あいつは、とつばやねん。ほつき。好きなようにさしだたらええねん。誰も本気でいてにせえへんで)

のんだくれ アルコール依存症に近い人。いつも飲んでいる人。
(飲んだくれの親父を持つ家は大変や)

よいなほ 酔った人。(あかんほ(赤ちゃん)と同種の使用例か。

(あのはいつも酔いたんほみたいな)と言つとう)
しがんだ・しだんだれ さえない、見栄えのしない様子・人。「しがむ」皮膚などが縮んで皺がよること。転じてさえない見栄えがしないから生じたものか。(そんないしがんだみたいな顔するなよ)「あんな しがんだれと一緒にいたらこつちまでピンボくさなるわ)

動作

うとた 歌う・自状する・破産する。(あいつ、先生にしばられて皆うとてしもだらし。俺らも正面に謝ったほうがええ(悪さをして、教師にしばられて、悪事を白状して))

かつかん いわゆる「ブツツン」すること。

かんかん・かんかんする 計量器具・計量すること。地引網で取れた魚などを、魚力ゴーと大型の秤(かんかん)にのせて計量する

こと。(へだ漁や。はよカンカンせなあかんで)

せちべん ケチ・節約家。(あいつせちべんやから貯めてるで)へあいつせちべんやから出しよらへんで)
いっせちべんやから出しそうへんで)
おごること。少々強張って人に振る舞うこと。贅沢をする・お金をつぎ込んでいる意味にも使つ。(そんなはりこんで大丈夫かない)(今日は競馬でもうけたんや。せやからはりこん

だるわ／＼はりこんだ着物着てるわ）

しばらくたなく。「しばきたおす」とも使う。（あのがき、いつべん

しばきたおさなあかんで。しばらくど（たたくそ）」

いてまう・いてもたる やつづける。ひとり目にあわす。半殺しに

する。（へいはあのがきはいてもたろ思とんや）

さらす する。行う。怒りを含んで問いかける時の例。（何さらし

とんねん（なにをしてるのか）

しー しなさい。やりなさい。（早よしい。禁止のときは（しいな）

（そんなイヤごとしいな。その子、困ってるやん）

ひく 敷く。（ここ）に布団ひくから、ゆつくりしてな）

まどう 弁償する。償う。（こわしてもしもたなあ。まどてもらうで）

いぬ 往ぬ。去ぬ。行くこと。去ること。（はよななな

おかんが心配するで（早く帰らないとお母さんがしんぱいするよ）

（「さつさといね」（早く帰れ）

くらわす 「食べる」の「喰らう」から「食べさせる」の意味。あ

る行為を「受ける」、特に強制的に与える。（ケンコツをくらわす

ど）

きばる 頑張る。

ゆうたかて 言つても・言つたところで。（そんなこと言うたかて

（いうても）どうしようもない）

様子 あかい 明るい （日のあかいうちに出かけたはうがええで。くら

なつたらあぶない）

いつこも ひとつも 「あの人シブチンやから金なんかいつこも出

すかない（あの人はけちだから、お金など一銭も出さないよ）

いとて・いとうて 痛くて（足の傷がいとうてこれ以上歩くんわ）

えーもん よい人・正義漢・特に勸善懲惡の物語などで正義の人を

えます。（子どもがよく使う）（ほくがええもんの役や。お前はわる

もんや）

しゃあない 仕方がない・どうにもならない。（雨も降ってきた。）

しゃあないなあ、今日は休みや／＼お前は、しゃあない奴や／＼店

さきで…（「もうちょっとまけてえな」「しゃあないな。あなたに

は負けるわ」）

しあうことなし しかたがなしに・やむをえず（子どもにいわれて

なあ、しあうことなしに来たんや。）

しんきくさい 面倒な・陰気な。（そんなしんきくさいこと言いな

はんな（そんな面倒で陰気なことを言わないでください）

どうらい たいへんな・面倒な・どうにもならない・取り返しのつ

かない。（あんたら、どうらいなことしてくれたなあ。どないし

てくれまんねん（きみたち、取り返しのつかないたいへんことを

してくれた。どのような償いをするのですか）

どくしょい ひどい・散々な。（今日はどくしょいな目にあつたわ。）

沖で雨に降られるわ、風は出るはで漁にならんかった（や）

はがい 思うようにならない・じれつた。（あの子見とつたら、

いつも負けてばかりではがいわ）

ぼつてん あいこ・同じ・同点。引き分け。子どもの遊びでよく使

う。（ぼつてんやから勝負なしや）

べつちよない 別状（別条）がない、特別な変化や異常がない。心

どんならん どうにもならない・困る。（そんなことして、どんな

ざんない せんないこと。仕方がない。（言うてもざんないことや

けど）

しゃあない しかたがない。しようがない。（どんならんことをし

てくれたな。しゃあないわ。ほな、わたがこないしたろ（済んで

しまだ）ことや。しゃあないわ）

だんない 形容詞 さしつかえない。大事ないの転。

びりびり 雨の降り始めて、少しづつ降ってきた様子。はつりつり。
そばえる 雨が「びりびり」より、もう少しはげしく降ってくる様子。軽い通り雨。「びりびりして来たでえ。けどそばえやろ」
もみない 上方語「もむない」の訛。ますい、おいしくない。

わやくそ 亂雑・混亂・無茶：「わや」と「こそ」付けて使用もあり。「わやくそにやられた（こてんぱんにやつつけられ

た）」へそんな、わやなこととするなよ（むちやしないで）」へあいつに家中、わやにされてなあ。どもならんわ」

少年たちの言葉

ハバ、ハバ 進駐軍が使ったハリイバッカを開きかじりで真似た言葉。「急げ・早く来い」という意味。少年が使用。

ゴスタン 由来不明であるが漁師言葉らしい。舟をバッカさせるときに使用した。「ゴスタン、ゴスタン」と言えば「バッカオーライ、オーライ」ほどの意味。

テツカンビール 鉄管ビールのこと。学校で水道蛇口から直接飲む水のこと。男子児童が使った言葉。

頭でつかちしりつもり 噛むことばで悪ガキが使用。「しりつもり」は「尻すぼみ」の意味。体のバランスの悪い者にからかって言う。

ひとつ〇がある… ひとつ〇がある・ふたつの〇がある・みつつの〇がある・よつづ横にも・五ついつもの〇がある・六つもこうに・七つなめに〇がある・八つやつぱり〇・九つここにも・十はどうとう〇だらけ。悪ガキが使用。単に言葉遊びとして仲間同士で声を合わせて言うこともある。頭に出来たデキモノのあとに出来た小さな跡を指差してからかって使用した。

ゆれん ユーレイ・フルセ（親ハゼ）ともいい端にやせた魚のハゼ。波止場の釣りに時々かかるが、猫も食べない。

ばばたれ 「ばば」は糞のこと。「たれ」は出すこと。魚の黒鰯・

チヌの幼魚をさす。

接尾語など

ええ はいえ、そいえ・そええ。「そんなんですよ」の意味で町娘などが用い親しみを表す。京都言葉の「一どすえ」の「え」と同じ例か。

しがいや（え）（そうやがいや／そやがいえ）で「そんなんよ」の意味。（あかんがいや（え））は「だめだよ」の意味となる。しけつかる 「在る、居る」の卑語。助詞「て」を介して統き、その動作をののしつて言う。（してけつかる／へあんなことさらしてけつかる）

しや 状態を表す語について命令、勧説など表現を和らげる。（あ

そこの店にいこいや（行こうよ））

なんといや 言問、問い合わせ。「なん」が「何」の意味。「とい」は「どえ」ともいう。この「と」は「ぞ」と同じような意味で用いられる。（なんど（ぞ）おいしいものはないか）

ええわいや 「ええわ」は良い、大丈夫。「い」「や」が付くと相手との距離を明確にする意図をしめす。「自分の良いように、好き

なようにするから」という宣言の意味を含む。

とな 強調の意味。（はいな（そうです・全くそうです））は同意の強調。

しとう 動詞について様子を表す。「～している」。（あんなこと言うとう）。本来は神戸弁で住吉川以西で使われているとされるが、「どう」は深江でも使われた。

しとん 「～とう」とよく似ているが、主に疑問の形で使われることが多い。（何ゆうとん（何言つてますか？））（何しとん（何しているのですか？））

とい 場所の基点を示す。（そこ）い置き（その場所に置きなさい）（ここ）いらがええ場所や（この）辺りが良い）

母音の強調

い→イイ か→カア き→キイ く→クウ け→ケエ さ→サア す→スウ せ→セエ と→トオ な→ナア に→ニイ ね→ネエ は→ハア ひ→ヒイ ふ→フウ へ→ヘエ ほ→ボ ま→マア み→ミイ め→メエ や→ヤア れ→レエ ろ→ロオ わ→ワア そ→ソア あ→アソ そ→ソア 遊→ヨウ	胃を「いい・いIが痛い」 蚊を「かア・かアがいっぱい飛んでる」 氣を「きイ・きイつけて歩きよ」 苦を「くウ・くウかける人や」 毛を「けエ・けエが抜けた」 差を「さア・どつちもさアがない」 酢・果・簾などを「すウかけて食べる」 背を「せエ・せエが伸びた」 手を「てエ・てエをたきいいな」 戸を「とオ・とオ閉めて」 菜のこと「へなア・なアの煮もの」 荷を「にイ・にイを担いで」 値を「ねエ・ねエが付かん」 歯を「はアが生えてきた」 火を「ひIが燃える」 魅を「すき焼きにはふウをいれる」 兵隊を「へエたい」、「堺を「へエ」など 帆を「ほオ・ほオ上げる」 魔「まアがさす」、「間まアが悪い」 実を「みI・みIがなる」 目を「めエ」 矢を「やア・やアが飛んだ」 札を「れエ・氣をつけ、れエ」 滑を「ろオ・ろオを滑ぐ」 輪を「わア・わアになつて踊る」 遊ばう・あそばう（皆であそば）
---	---

い→イイ え→エンド か→カウ く→ク け→ケ さ→サ す→ス せ→セ と→ト な→ナ に→ニ ね→ネ は→ハ ひ→ヒ ふ→フ へ→ヘ ほ→ボ ま→マ み→ミ め→メ や→ヤ れ→レ ろ→ロ わ→ワ そ→ソ あ→ア そ→ソ 遊→ヨ	いがむ 動く・うごく エンドウ・エンドまめ 第・かゆ（芋かい） 帰る・かえる（へかいりしに寄つて） 学校・がつこう（がつこ（頭）はええけれど） 孤きつね（けつねウドン） 「か」の訛の發音。（けんくわ（喧嘩） 買つて・かつて（これこーでんか） 昆布・こんぶ（だし）ぶ 牛蒡・ゴボウ これだけ さんだけ さと しゅうろ じょうり せんせ ぞっせん ぞっせん だいこ たいそ たなもと たのき たほこ つおい とふ なせる ねき 撫でる・なでる 「根際」の転きわ、そばの意味で上方の方言。（わた いのねきへおいで（私の側へ来なさい））（道のねきに 寄らんと危ない（道の端へ寄らないと危ない））
--	--

びんば ふつきん べんと ほてから （時間的に）それから。（何かに）加えてさらに。へぼてからどつかへ行こ。へぼてからこんなこともある。〔それに加えてこんな事ありました。〕	貧乏・びんばう へびんばひまなし 布巾・ふきん 弁当・べんとう へんと持ち （中にはそんなガラガラが悪い）といたいの人が一度は口にした。中にはそんなガラガラの悪さを嫌って、わが子が通う学校も声屋の小学校へ越境させる親前・まえ・まいかけ（前掛け）
まま ゆわい ゆーれん よばす （神戸深江のなんといや）	ご飯。食事。めし。まんま。 祝い・いわい・ゆわいめでたの若松様よ 幽靈・ゆうれい（深江で釣れたハゼの一種を指すことがある） 硬いものを程よい軟らかさにする。類語に「よばす」「よばらす」がある。これは「弱る」「弱らせる」という意味で使われる。ここから硬いものを柔軟にする、軟らかくするに転じたと思われる。
おわりに——言葉から考える深江の風土と人間関係	「神戸深江のなんといや」
神戸弁はいわゆる上方・関西弁に比べたら「汚い・乱暴」といわれる言葉の一つである。その汚い・乱暴な言葉、言い方の象徴として「神戸深江のなんといや」がある。深江の人間のや自嘲をこめた表現である。深江のこの言葉は海辺のいわゆる「ハマ言葉」「漁師言葉」といわれる。海を相手にする仕事はオカの煙仕事に比べれば、その働き場所は戦場といえるだろう。波があり、風があり、板一枚で生死が分かれることもある。網の扱いひとつ、竿や糸のあつかいのちよつとした手違いが漁の成否を分けることもある。指示を出したりミスを指摘するときに優しい物言いでは大魚を逃がすのだ。互いの声は厳しく大きいものにならざるを得ない。おつとりした言葉では漁はできないのだ。	深江の「なんとい」は「ワレ、なんとい」「なんどえ、オンドラ」と一対で使われることがある。このとき「ド」が強く発音され「レ」や「ヲ」が巻き舌で発声されると々々亂暴に聞こえる。「なんとい」が「なんどえ」となつて相手に発せられるとき双方の関係は穏やかではない。手の早いものは「なんど」から「え」の発声と同時に胸倉をつかんでいる。「なんといや」の「なん」本来は「何?」という疑問、問い合わせの言葉である。「なんやねん」という言い方も上方の言葉で聞かれる。しかし「深江のなんといや」というときは喧嘩口論の啖呵の一つとなる。江戸っ子なら「何だ、てめえ」、広島なら「なんなら、この外道」というようなものである。

ただ、「なんとい」は語尾に「や」が付くときは、「呼吸おいた間が出来る。少し柔らかい表現になる。「や」をつけて言うときは、互いにそれ以上に険悪ムードにはならないのが普通である。

似た言葉に「どなしてん」というのがある。口論になつたときの返す言葉で使われる。「それが「どなしてん」「どないしたんとい」である。お互いの言葉が「どなしてん」「どなしたんとい」「なんとい」「なんどい」「なんどえ」と関係は悪くなる。ただ「どなしたん」といえば相手を攻撃する表現になる。

同じように「なんといや」も言い方によつて「なんだ」という安心、安堵を意味することもある。その意味では「深江のなんとい」もまったく柄が悪いばかりでもないのだ。

「深江のダンゴ」

深江の人間の気質を「ダンゴ」にたとえた表現言葉である。ダンゴは「串ダンゴ」のことである。深江特に男は、集団になつたら強いと言う意味である。團結心があるという意味もある。さらに、リーダーがいなくて固まらず集団にならなければ、だらしがないという自嘲の表現でもある。串ダンゴは一つ一つがくついてなかなか離れない。これが團結心の強さを表している。一本にまとめる串、すなわちしっかりしたリーダーがいれば強力な集団になるのだが串がなければ「あかんたれ」でしかない。

深江のダンゴという言葉は、深江の町が、昔から海をその生活の場としてきたまちであることに関係があるかもしれない。歴史を繰り返していく。時には深江の漁師たちがその舟を連ねて他所の漁師を排除したことにも何度はある。そんな時には互いの舟は連絡プレーが求められる。しっかりしたリーダーも不可欠であった。

深江の漁師は、幼いころからこの地で育った人が多い。別々の船に乗つて漁場に出てもそれぞの舟には幼馴染が乗っている。事故があれば深江中の漁師がその舟を出して救助や捜索に当たる。これが團結心・連帯感の基でもある。

幼馴染が多く、たとえば互いが親戚であり一族であることが少なくてない。この親戚一族の関係は時にライバルとなり反目する原因にもなる。しつかりした一族の長がいる場合は團結するが、そうでないときはバラバラで、そこから転がつているダンゴでしかないのだ。人間のある集團をダンゴにたとえるならば、別段深江に限らないことである。この地の人は自分たちのことを自嘲氣味に「深江のダンゴ」といったのだ。そこに深江の人のユーモアを感じる。

(文責・森口健一)

本庄小の歴史的な写真と展示

史料館館長 大国正美

百十二回目の創立記念日を記念して、三月三日、市立本庄小学校

の歴史写真展を、深江塾が学校の多目的ホールで開催した。戦争や災害に翻弄された時代

を語る五十一点を展示了。

二〇一二年十一月に深江南地域福祉センターで開催したところ、好評で今年は小学校の創立記念行事として初めて開催した。



写真1 明治33年（1900）完成の平屋建て校舎

会場では明治三十三年（一九〇〇）に建てられた木造平屋建ての初代校舎の写真、昭和五年（一九三〇）の男女別々の卒業式や、昭和三十年代は一クラス五十人から五十五人もいる過密教室の風景などを展示。昭和三十年代までは深江の浜で水練が行われたが海が汚染され難なくなりブールが設けられたこと、大正元年（一九一二）に設けられた忠魂碑が木の橋から石垣の橋へと整備されたながら戦後は撤去されたこと、昭和四年（一九二九）に建設され昭和九年（一九三四）の室



写真2 大正元年（1912）に建てられた忠魂碑

戸台風で児童たちが避難したこと、校庭で銃を構え訓練する隊列、空襲を受けガラスのない校舎に集う児童の様子など、激動の時代の興味深い写真が並べられた。四日には児童も見学した。 ◇

収集した本庄小学校の代表的な写真を紹介したい。

写真1は明治三十三年（1900）完成した平屋建ての校舎で、三月三日に校舎落成式を行った。尋常小学校には裁縫科（本庄裁縫学校）が併設され、校舎正門の東西に建つ白い標柱には、東に「本庄尋常小学校」、西に「本庄裁縫学校」と書かれている。写真2は大正元年（1912）に校庭の西寄りに日清・日露の戦争で亡くなつた方の慰靈のため、忠魂碑が在郷軍人によって立てられた。

大正九年（1920）七月、校庭の拡張と共に木造二階建ての新



写真3 昭和初期、校舎の前で銃を構えた訓練の様子

校舎が出来、昭和四年（1929）四月、校庭西端に既存木造校舎に接して鉄筋二階建ての八教室を持つ校舎ができる。この校舎は昭和天皇即位記念事業として、本庄村役場（のち本庄公民館）とともに建設された。昭和九年（1934）の室戸台風のとき、児童たちの避難場所となつた。写真3は大正九年（1920）完成の木造校舎の前で銃を構えた軍事訓練の珍しい写真である。当時、小学校高等科や青年学校などがさしきりに訓練を行つていた。

昭和十二年（1937）三月、鉄筋三階建ての校舎が竣工するが、昭和二十年（1945）五月十一日、川西航空機甲南工場を目標にした米軍B-29の空襲を受けた。しかし、天皇の写真や教育勅語を取めた奉安殿は焼け残つた。被災当時の写真は『本庄村史』にも掲載している。写真4は昭和三十六年（1961）の航空写真である。国道四三号もなく、海岸にはまだ砂浜が残つてゐる。

写真4 昭和36年（1961）の校舎と海岸線
（森口健一氏収集）

トライやる・ウイークと史料館

——本庄中学校の生徒を受け入れて——

史料館研究員 高田祐一

二〇一二年のトライやるウイークは、六月七日・八日に実施した。二名参加予定であったが一名が病欠となり、本庄中学校二年生の端山拓希さんのみの参加となつた。

一日目の午前中は史料館の概要や業務についてガイダンスをした。そして博物館の役割や博物館資料の取り扱い方をDVDの映像で学習した。早速学習した内容を実践するために展示替えを体验してもらつた。季節展示の

「五月人形」から「夏の風物詩」に展示替えをした。

展示中の五月人形は慣れてきたのか笑顔がみられるようになつてきた。

二日目は資料整理の一環として資料の写真撮影をした。撮影の際の明るさや構図などに気を付けながら作業した。その後、博物館の情報発信の体験としてWebサイトなどについてレクチャーした。

午後からは史料館のブログを実際に更新してもらった。ブログでは手動マッサージ器を紹介するレポートを書いてもらい、ブログで公開した。掲載写真も午前中に端山さんが独力で撮影した写真を使用した。そのレポートを紹介する。

「手動マッサージ器の紹介」

レイアウトから陳

この資料は昔肩たきなどに使用されたものです。

端山 拓希



写真1 「夏の風物詩」の展示



写真2 土器洗い

列まで担当でもらった。藤川研究員から一部助言をしたもの、展示物は見やすくカテゴリ毎に整理されおり、完成度の高いレイアウトとなつた。その後、お昼前と午後からは考古遺物の整理として土器洗いを行つた。土器を傷つけないように慎重に作業にあたつてくれた。午後からは慣れてきたのか笑顔がみられるようになつてきた。

二日目は資料整理の一環として資料の写真撮影をした。撮影の際の明るさや構図などに気を付けながら作業した。その後、博物館の情報発信の体験としてWebサイトなどについてレクチャーした。午後からは史料館のブログを実際に更新してもらった。ブログでは手動マッサージ器を紹介するレポートを書いてもらい、ブログで公開した。掲載写真も午前中に端山さんが独力で撮影した写真を使用した。そのレポートを紹介する。

これは肩たたきをする人一人、される人一人の二人に分けてするととても使いやすく、肩たたきをする人も手に力を入れずに肩たたきをすることができます。

この資料を見てい

ると昔ながらの感じ

が出てくるし見てい

るだけではなく実際

に手にとつて使って

みたい、と思つたり

します。

◆
この道具が今家にあって実際に使えるなら電気を使わないので、節電にもなるし、子供が楽しくすんで肩たたきができると思います。

この一日間それぞれの仕事を非常に丁寧にしていたのが印象的であった。端山さんは土器洗いが一番楽しかったとのこと。やはり本物の資料触ることは、学校ではできない体験であり関心が高いのかもしれない。これからも活躍を貢献一同頑張っている。



写真3 撮影した手動マッサージ器

史料館におけるＩＴ施策

↓ webサイトアクセス状況 ↓

史料館では、情報発信のツールとしてWebサイトとブログを運営している。Webサイトとブログへのアクセス状況を報告する。二〇一三年三月一日時点での訪問数（ユーチャーが開始したユニークセッションの数）は、サイト運営開始時からの累積が一〇三四五訪問であった。昨年の二〇一二年二月二日からの差分が三〇五二訪問で一日あたりが八・〇アクセスで前年比では五%増となつた。

ブログはサイト運営開始時からの累積訪問数が一八三三四訪問であつた。昨年の二〇一二年二月一三日からの差分が一〇八四五訪問で、一日あたりは二八・四アクセスで前年比では四%増となつた。Webサイトでは一日あたりの訪問数が微増しているものの大さな増加はみられない。基本的にWebサイトのコンテンツは前年から増えていないため、前年と同水準になつたと考えられる。ブログでは前年比で四%増と大きく増加している。

昨年度から始めた過去の史料館だよりを紹介する「プレイバック」が累積一六回になり掲載している情報量が増えたため検索にヒットしやすくなつたと考えられる。情報の蓄積量に比例してアクセスが増加しているといえよう。二〇一二年度の施策として、より調査成果の普及効果を高めるために、ソーシャルネットワークサービスのfacebookに公式ページを作成した。ブログの記事が自動的にfacebookに配信される仕組みであり、情報の拡散が期待される。またダウンロード可能となつていて「史料館だより」のダウンロード数を毎月に把握できるように改善した。

史料館日誌抄

史料館館長 道 谷 卓

二〇一二年四月以降

6月7日／ 8日	トライやる・ウィーク・本庄中学校二年生一名を受け入れ、二日間史料館業務の体験
7月7日	甲南大学法医学部久保ゼミ
7月13日	東灘区役所職員研修
7月28日	わくわく東灘（東灘区役所）
8月 10月7日	魚屋道を歩く会
10月13日	深江歴史探訪まち歩き
10月20日	東灘九条の会
11月11日	六甲自然案内人の会
11月18日	明舞九条の会
11月20日	八多小学校 三年生 大手前大学
11月27日	宝塚市立中山桜台小学校 （見学者）
△二〇一三年▽	
1月15日	六甲アイランド小学校 三年生 （見学者）
1月18日	福池小学校 三年生 （見学者）
1月22日	稗田小学校 三年生 （見学者）
1月24日	本山南小学校 三年生 （見学者）
1月25日	御影小学校 三年生 （見学者）
1月29日	東灘小学校 三年生 （見学者）
1月31日	本山第三小学校 三年生 （見学者）
2月1日	東灘小学校 三年生 （見学者）
2月8日	本山第二小学校 三年生 （見学者）

資料寄贈者ご芳名

2月12日	本山第一小学校 三年生 （見学者）
2月14日	向洋小学校 三年生 （見学者）
2月15日	福住小学校 三年生 （見学者）
2月19日	東灘小学校 三年生 （見学者）
2月22日	西灘小学校 三年生 （見学者）
2月25日	本庄小学校 三年生 （見学者）
2月26日	大川 弘・土井ますみ・辻淳喜（藤川祐作記）

深江を歩くシリーズは今回は浜辺です。漁村ならではの風景の回想を知っていただけれどと思います。また漁村特有の言葉を深江塾の皆さんと集めてみました。漁師町らしい芬圍気が言葉の中にも残っていましたが、これも時代とともに忘れられようとしています。また昨年度開催した本庄小学校の写真展を、今年度は本庄小学校の創立記念行事の一環として学校で開催することができました。協力いただいた皆さんに深く感謝いたします。

編集後記

「生活文化史」 第41号 2013・3・31

編集／大國正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-1453-14980 (FAX兼用)

<http://homepage2.nifty.com/fukae-museum/>